

(2) 時制の一致

だいたいにおいて、主節の動詞が過去形有的时候には従節の動詞は過去形または過去完了形をとり、これを時制の一致という。時制の一致には例外もあるが再度次の例を検討したい。

I think it is right. (それは正しいと思う)

I thought it was right. (それは正しいと思った)

I thought it had been right. (それは正しかったと思った)

ここで主節の動詞が過去形であるとき、従節の動詞は現在形や現在完了をとることができない。意味論的に考えると従節には過去を表す現在完了時制がきてもよいはずであるが、“時制の一致”の屈折的影響を受けるのはhaveの部分のみであり、その本来、目的補語に当たる部分は影響を受けない点であり、たとえ完了時制という時制帯が存在してもそれは意味論的な影響を受けないという点である。すなわち、主節の動詞が過去形の時には従節の動詞は過去形または過去完了形をとり、これを時制の一致というが、過去は現在完了でも表せるため、主節の動詞が過去形の時には従節の動詞は“過去”と勘違いして従節の動詞に現在完了をとる学生が出てくる可能性があるのである。やはり、時制の一致や仮定法の問題を解く時には、一度その時間的文意から離れ、現在完了は現在形として、過去完了は過去形としてhave(had)のみを見て形態的に処理するほうが混乱がないのである。

さて、英語の実際の場面で、常にセンテンス上にある2つ以上の動詞あるいは助動詞についての時制の一致を気にかけて流暢に発話するのは非常に困難なことであるし、普通そんなことに気持ちがいいたら話すことはできない。ヒトが発言するときには通常、何かひとつの伝達事項について考えながら気持ちをいれて発話していくものであるからである。とくに、従来の時制論において視点は最低でも3つあり、さらに、完了時制を加えたり、仮定法を特別事項として加えるなど、とても実用に耐えないものであった。時制の一致の本質は、の同じ事柄について述べるときは、SVごとと同じ時制を使いなさい>(*大原則: 時制の切替えはVで行う。情報の単位はSVごとである。)ということであるが、SVごとにそのSVに適切なモードを使えば結果として合ってくるであり、実際もその場その場で決定しているはずである。本論では、その時その時(SVごとの)の動詞の形態をBODYの外の世界の話かMINDの中の世界の話かで**現在形か過去形か**判断する。また、発話に**気持ち**(主観法と客観法という視点)が入れば**主観語(助動詞)を入れるだけ**のことで、完了も仮定法も別に気にするものではなく、非常にシンプルである。